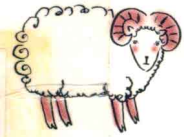
言語学

湯川恭敏 著



ひつじ書房

言語学

江苏工业学院图书馆
藏书章

湯川恭敏 著

ひつじ書房

著者　湯川恭敏（ゆかわ・やすとし）
（略歴）1941年、和歌山県に生まれる。1966年、
大学院人文科学研究科博士課程中退。東京外国
を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究
（主要研究書）
『言語学の基本問題』（大修館書店、1971）、
『バントゥ諸語動詞アクセントの研究』（ひつ
1995）

言語学

発行日	1999年6月18日初版1刷
定価	2800円＋税
著者	©湯川恭敏
発行者	松本　功
組版者	GOTO+iMat
装丁者	大野 博／加藤みほ(ae)
印刷・製本所	田中製本印刷株式会社
発行所	有限会社　ひつじ書房

101　東京都千代田区猿楽町 2-2-5 興新ビル206
Tel.03-3296-0687／Fax 03-5281-0178
郵便振替00120-8-142852

落丁乱丁などがございましたら、小社宛お送り下さい。送料小社負担でお取り替えいたします。ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下されば幸いです。

info@hituzi.co.jp
http://www.hituzi.co.jp/index.html

本書を複製する場合、書面による許可のない場合は、不正なコピーとなります。不正なコピーは、販売することも、購入することも違法です。法律の問題だけでなく、学術・出版に対するきわめて重大な破壊行為です。組織的な不正コピーには、特にご注意下さい。

ISBN4-89476-113-0 C1081
Printed in Japan

本書は、再生紙を使用しています。
使用銘柄　本文紙（OK書籍グリーン100）、
表紙のPPは、ダイオキシンを発生させません。

序言

筆者は、1991年度以来、東京大学文学部言語学専修課程の「言語学概論」の講義を担当してきた。「言語学概論」の講義のやり方にもいろいろあるが、言語学の概要が一応全て伝わるようなものとすることと、知識を伝えるより言語学の考え方や技術を理解させるようなものであることを重視した。前者については特に付け加えるべきことはないが、後者については若干説明を要する。東大における「言語学概論」の履修者の何割かは、研究者になってゆく。特にそういう学生に対しては、知識より考え方や技術を伝えるほうが有益である。というのは、知識は、言語学をやる気さえあれば、さまざまな文献から自分で得ることができるからである。とはいっても、聴講者のほとんどは、言語学についての知識をまったく持ち合わせていないと思われるため、少々くどいほど、初歩的な内容をも講義した。従って、その講義の内容は、言語学概論を聴講する意図を持った人なら誰でも理解できるものであったはずである。

筆者はまた、現在の日本や世界の言語学の趨勢に対して、はっきりした批判的見解を持っている。それは、主として、次の4点にまとめられる。

（1）個別言語の構造の解明は、言語学者の任務であるが、個別言語の事実の正確な認識と分析技術の向上の努力を伴わないで、「理論」なるものにとびつきすぎる。

（2）それぞれの言語の解明は、その言語の示す状態からすなおに真実を引き出すことを基本とすべきであるのに、既成の枠を押しつけて解釈しようとする傾向が強い。

（3）ある結論を主張する論拠をいろいろ挙げても、その論拠なるものが、本当にその結論を支持するものであるのかという考察が不足している。

（4）（日本の言語学者は）外国の研究者の「理論」や「記述結果」に無批判すぎる。

このようなことも、学生に向かっても率直に語ってきた。定説のようにいわれているものについても、まずそれを分かりやすく説明した上で、どこがおかしいのか、それに対してどういう考え方を対置すべきかを提示した。

こうしたことも含め、筆者による「言語学概論」は、言語学のさまざまな問題に関して筆者自身の考え方を全面的に打ち出したものとなってきた。これは、自分の考え方以外はすべて誤っているといった思い上がりからではなくて、自分が現段階で正しいと思うことを学生に伝えるのが研究者・教育者としてのあるべき態度だ、という確信に基づくものである。なお、筆者の考え方の根源は、学生時代の勉強を別にすれば、大学院生時代の現代チベット語の調査と分析、そののちの数年間に集中的に研究

した理論問題、1975年にはじまるアフリカのバントゥ諸語の現地調査を中心にした調査と分析、等々にある。さらには、1990年度以降の東大における学部と大学院での教育の経験も、筆者にとっては得難い内容を含んでおり、それに基づいて毎年少しずつ講義内容の改善を計ってきた。

そういうわけで、筆者の「言語学概論」の講義は、おそらく普通の「言語学概論」の講義のイメージからはいくらか離れたものになったかも知れないが、筆者の「言語学概論」の最初の頃の履修者の一部が、大学院博士課程で博士論文執筆に取り組むようになりつつある今、上記のような態度選択が、少なくとも誤ってはいなかったように感じられる。

こうした「言語学概論」の内容を一般読者向けに書き下ろしたのが本書であるが、書いている途中で付け加えたいことが出てきたりして、「言語学概論」の講義では触れなかった内容も含む結果となった。また、文章にすると、口で話す場合よりいくらか理解されにくくなる傾向がある（口頭の講義の場合は、学生の顔を見て分かってなさそうだと、もう一度かみくだいて説明できる）ので、特に論理展開に無理がないように、また、直接筆者の話し方を観察していなくても理解しやすいように、叙述にかなり工夫をこらしたつもりである。従って、本書は、言語に興味を持つ人なら、順を追って読めば、誰にでも理解していただけるはずのものであるし、一度読んでよく分からなくても、それまでに理解できたことの上に立ってもう一度読んでいただければ十分に理解できるはずのものである。

本書には、ごく少数の引用文献のリストは付すが、参考文献は付さない。筆者として賛成できる内容を含んだいかなる文献も、賛成できない観点をも含むため、それを無条件に推奨できない、という理由からである。従って、そういった文献を知りたい読者は、他の概説書、たとえば、筆者も参画した、『放送大学教材　言語学』を参照されたい。筆者自身によるもので、本書に盛られた考え方を打ち出したものも、参考文献として挙げることはしない。いいたいことは、すべて本書で述べるという方針からである。

本書の読者がまったく初歩の人であってもそうでなくても、本書の内容をよく理解されて、自らの言語学的素養を高める一助にされることを期待する。筆者としては、理解は求めるが、筆者の考え方に対する賛成を必ずしも求めるものではない。

本書の出版を快諾された、ひつじ書房の松本功社長に心よりの謝意を表したい。

1998年８月

湯川恭敏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序言 i

序章　言語に対する態度 1

第1章　言語本質論 7
§1．言語とは何か 7
§2．人間言語の重要な性質 9
§3．言語学の二つの分野 12

第2章　音声学の基礎 13
§1．音声学と言語学 13
§2．音声学の基礎（1） 14
§3．音声学の基礎（2） 19

第3章　音韻論 27
§1．音韻論と音声学 27
§2．音素 27
§2－1．音素の本質 28
§2－2．音素の帰納方法 30
§2－3．音素は弁別的特徴の束か 36
§3．音節 42
§3－1．音節の概念 42
§3－2．音節とモーラ 43
§3－3．同一言語における音節構造の不確定性 46
§4．アクセント 46

§４－１．アクセントに関する基礎的諸問題 47
§４－１－１．アクセントと音節、調素 47
§４－１－２．アクセントの音的実質による差異 47
§４－１－３．いわゆる「声調」について 48
§４－１－４．アクセントの制約とアクセントの型 48
§４－１－５．アクセントのかぶさる範囲 49
§４－２．日本語アクセントの若干の問題 50
§４－２－１．東京方言 50
§４－２－２．和歌山方言 53
§４－３、アクセントのその他の問題 56
§４－３－１．環境における変異 56
§４－２－２．単語ではない形態素のアクセント 58
§４－２－３．一型アクセントの問題 61
§４－３．アクセントの研究 61
§５．母音調和・子音調和 62
§５－１．母音調和 62
§５－２．子音調和 63
§６．イントネーション 64

第４章　文法論 65
§１．文法の定義 65
§２．文法の構造の概略 67
§３．言語の文法の可能な範囲 68
§４．文等の分析 76
§５．中間的単位 83
§６．文法的階層 89
§６—１．文法的階層の定義 89
§６—２．階層の上下関係 91
§７．文法範疇 93
§７－１．文法範疇の定義 93
§７－２．文法範疇の認定方法 95
§７－３．下位範疇 101
§７－４．特殊な下位範疇 103
§７－４－１．疑似下位範疇 103
§７－４－２．屈折的範疇 105

§７－４－３．派生的範疇 108
§７－５．文法的階層と文法範疇 108
§７－６．文法範疇と結合型 110
§７－７．文法範疇のその他の問題 111
§７－７－１．呼応と範疇 111
§７－７－２．異なる位置と同一範疇所属問題 114
§８．単語 115
§８－１．単語の定義と認定方法 115
§８－２．形態論 120
§８－３．形態素についての補足 128

第５章　意味論 131
§１．単語の意味 131
§１－１．単語の意味の定義 131
§１－２．単語の意味の記述 133
§１－３．単語の意味の研究の技術 138
§１－４．単語の意味はさらに小さい単位に分析できるか 139
§１－５．同一単語と同音異義 140
§１－５－１．同一性判定基準（１） 141
§１－５－２．同一性判定基準（２） 143
§１－５－３．同一性判定基準（１）と（２）の間 146
§１－５－４．「多義」について 149
§１－６．単語の意味と観念 150
§１－６－１．単語の意味と観念 150
§１－６－２．観念と同一性判定基準 151
§１－６－３．観念の「種類」と単語の意味 151
§１－７．単語の意味における主観的要素 152
§１－８．単語の意味に関する、その他のいくつかの問題 153
§１－８－１．同義語、類義語、およびその他の問題 154
§１－８－２．反義語 156
§１－８－３．比喩（的用法） 157
§１－８－４．プロトタイプ 158
§１－９．単語でない形態素の意味 159
§２．複合言語形式・言語形式連合の意味 159
§２－１．複合言語形式・言語形式連合の意味 160
§２－２．結合型の意味 162

§２－２－１．結合型の意味 162
§２－２－２．結合型の意味と同一性の検討（１） 163
§２－２－３．結合型の意味と同一性の検討（２） 175
§２－３．結合の可否 182
§３．文法的事実と意味論的事実の境界 185
§４．意味研究と言語感覚 187

第６章　歴史言語学 191
§１．言語の変化 191
§１－１．　音韻変化 191
§１－１－１．　規則的音韻変化 192
§１－１－２．　個別的音韻変化 194
§１－２．　文法変化 197
§１－３．　意味変化 198
§１－４．　形態変化 200
§２．言語の比較研究 200
§２－１．系統関係の証明 201
§２－２．祖語の再建 205
§２－３．内的再建 208

第７章　言語学のその他の分野 211
§１．方言と言語 211
§２．言語地理学 211
§３．社会言語学 213

第８章　言語調査の諸問題 217
§１．基礎的調査 218
§２．より高度の調査 220
§３．言語調査に関する一般的問題 221

第９章　言語学の若干の潮流についてのコメント 223

§１．生成文法論 223
§２．認知言語学 224
§３．類型論 225
§４．談話論 227
§５．若干の追加 228

引用文献 229
付図・付表 231
索引 237

序章　言語に対する態度

言語学という学問分野は、人間が話す（あるいは、かつて話していた）すべての言語を対象とし、また人類の言語に関係するあらゆる現象を扱う。地球上に現在話されている言語が数千に及び、その圧倒的多数が不十分にしか（あるいは、全然）研究されていないのが現状であることから、各言語の構造を解明してゆくことと、そういう解明のための方法論と技術の向上が、言語学の当面の中心的なテーマであるといってよいであろうし、おそらく、言語学という分野が存在し続ける限り、やはり中心的テーマであることをやめないであろう。その過程において、人類言語一般にどのような特徴が存在するのか、また、人類言語にどういうことがありうるかといったことの解明も、今ひとつの主要なテーマであるといえよう。また、各言語の変化の記述と言語変化一般に共通する特徴の解明も、過去の記録が残っている言語が相対的に少なく、残っていても話されていた言語に比べると資料として量的に少ないものでしかないため、多くの制約があるが、極めて重要なテーマである。

ここで強調したいのは、当面の相対的重点が、未調査の（もしくは、調査不十分な）言語の調査と分析（および、そのための方法論と記述技術の向上）にある、ということである。なぜかというと、一方でこれまで調査困難であった言語が急速に調査可能となり、他方で多くの言語が死滅の危機に瀕しているのが、現代の１つの特徴であるからである。かつては、多くの「未開地域」の言語の調査には大変な困難が伴っていた。しかし、現在では、全世界的な都市化、交通機関の発達等々により、比較的容易に多くの言語にアクセスすることが可能になっている。言語学の側にその用意があれば、かつては考えられもしなかった言語の調査が可能になった時代に我々は生きているのである。だが、同様の要因は多くの言語を死滅に導き、現存する言語の数が半減するのも時間の問題だとさえいわれている。つまり、この時代は、やる気があれば多くの言語の調査が可能になるが、時期を失すれば、多くの言語を未調査のままに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死滅させてしまいかねない時代なのである。

従って、こうした方面の努力が言語学に求められているのであるが、残念ながら、それが言語学研究者の真の共通認識にはなっていない。すなわち、未解明言語の調査と分析を不必要とする言語学研究者はまずいないであろうが、では実際に自分としてその方向にどういう努力をしようかと真剣に考えている言語学研究者は多くないのではないか。未解明言語の調査と分析には特殊な困難があり、なかなかその方向に踏み出せないのかも知れない。しかし、未解明言語の調査と分析というのは、言語学者がやらなければ誰もやってくれない仕事なのである。

さらに、もう１つ残念なことがある。それは、現在の言語学者の調査分析技術は一般にあまり高くないということである。筆者がこれまで手掛けてきた言語の研究についても、あるいは、何かの機会に接した他の言語の研究についても、一方で、方法論的に「古く」ても、長期間かけてその言語に集中し真摯な研究を続け、それなりに優れた業績をあげている人々がいる一方、いわゆる言語学者が言語学的分析と称して行った研究に、感嘆できるレベルのものが多くないのである。その主たる理由は、そもそも最初の段階の観察と、得られたデータの基礎的分析の点で力量不足があることにある。ともすれば、観察や基礎的分析がいい加減のままで理論化しようとしたり、何かの理論にとらわれて、その言語自体の真実をえぐり出そうとするのでなく、その理論なるものが問題の言語の分析に適用可能であることを示すことだけを事実上の目的にしているものさえある。また、分析技術の重要性を軽視する傾向、分析の誤りを大目に見る傾向が、はっきりとはいわないまでも、一部の言語学者に感じられる。しかし、誤った分析の上に立って優れた言語学理論を構築しようとしても到底無理である。自らの分析技術を向上させる努力を放棄して言語を云々するのは、自転車に乗れないで自転車についてその本質を云々しようとするのに似ている。

筆者は、言語学を発展させる上で当面最も重要な課題は、調査分析の十分でない多くの言語の調査分析を大規模に行うことである、と確信する。従って、言語学の理論的側面の研究も、この仕事を有効に進めることに従属すべきであると考える。現在さまざまな「理論」がもてはやされているが、そのほとんどは、少数の言語に関する知識に依っており、多少多くの言語を視野に入れた理論であっても、言語学が全面的に依拠するにはあまりに不正確な分析に基づいており、もし、多くの言語の正確な記述が進むならば、そうした理論は、言語学の長い歴史の中では１つのエピソードに過ぎなかったことが認識されるようになるであろう。

言語学をはじめるにあたって、次のことは、絶対におさえておくべきである。

（１）言語の間に優劣の差はない（母語として話す集団が存在するならば）。

（２）日常生活における話し言葉の研究を最優先すべきである。

（3）独立した言語の間に似た事柄は存在するが、「同じ」事柄は存在しない。

まず、（1）について説明しよう。言語の間には、話し手の数に大きな差があるが、そういう差は、言語の優劣によって生じたものではなく、政治的その他の要因によって生じたものである。また、言語には、「発展」した社会に対応するものとそうでないものがあるが、どの言語も、その社会には十分に奉仕しており、また、人間社会が根本的な点では優劣つけ難いことを考えれば、そのようなことは言語に優劣を生むものではない。また、言語には文字を有する言語とそうでないものがあるが、それも言語の優劣と関係がない。なぜなら、言語の核心的部分は話し言葉であって、話し言葉にはその言語社会の気の遠くなるほど古い時代からの無数の個人の認識活動が反映されているからである。もっとも、言語学の飛躍的発展の中で、どういう言語が人間にとってもっとも適したものであるかが明らかになる可能性自体は否定できないが、現在の言語学の水準で、ある言語が別のある言語より優れているなどといったら、それはインチキである。もっとも、（　）内の但し書きが示すように、母語集団が存在しない言語の場合は、その用途が人間生活の全面にわたらず、従って、語彙も貧弱であってよく、文法も整備されていることを要しない。いわゆるピジンのような場合である。こういう言語まで、他の言語と優劣の差はないということはいえないであろう。しかし、生まれがピジンであっても、母語集団が生じたならば、あらゆる用途に奉仕しなければならなくなるので、語彙・文法の両面において、通常の言語に匹敵する言語に発展転化する。

（2）については、上にも述べたように、言語の核心的部分は話し言葉であるということがその理由である。文字を有しない言語も多いし、文字を有しても多くの話し手がそれを利用していない言語も多い。従って、話し言葉を対象にしないなら、そもそも研究になどならない言語が多い。また、書き言葉が存在している言語についても、話し手が現存しないならばともかく、現存するならば、我々の言語生活の圧倒的部分が話し言葉の使用であることからいって、話し言葉の研究を最重要視すべきである。さらに、話し言葉に基礎をおいて研究しないと、本質的に話し言葉の分析にのみ関係する音韻分析の技術が向上しないのは当然であるが、言語学者にとって必要な「言語感覚」の向上も期待しえない。このことは、もちろん、書き言葉の研究を無視してよいということではない。話し言葉の研究を最重要視すべきであるとすることに異を唱える言語学者もいないとはいえないが、まともな言語学にとっては常識に属することがらである。

次に、（3）について説明する。言語内のあらゆる事柄は、それぞれの言語全体の中でのみ意味を有する。従って、1つの言語の中に認められるある事柄と別の言語の中に認められる似たような事柄が、「同じ」であるか否かを問うこと自体が無意味と

いうべきである。たとえば、ある言語の「受身形」と別の言語の「受身形」のあらわす内容を考えてみると、互いに似ているのだから（だから同じ用語で呼んでよい）かなり重なりあうに違いないが、決して一致しないであろう。なぜなら、一方の言語の「受身形」のあらわす範囲がその特定の範囲に決まっているのは無限の可能性の内の１つが選択された結果であり、他方の言語の「受身形」のあらわす範囲がその特定の範囲に決まっているのも無限の可能性の内の１つが選択された結果であり、その両者が一致する確率は「無限大分の１」の２乗、すなわち、限り無くゼロに近いからである。従って、「これは何々語の何々と同じです」という言明ははじめから誤りである（「～に似ている」とはいえる）。では、なぜ、英語についても日本語についても「動詞」などといってよいのか。それは、まったく便宜的な理由による。要するに、すべての言語につき違った術語を用意することは不可能だから、似たものをあらわすのに同じ術語を使うしかないのであり、同じ術語を用いて表しているからといって同じものであるとは決していえないのであり、「本質的に同じ」ということもできないのである（単に似ているだけである）。よく言語における「普遍性」が云々されるが、この言い方自体不適当に思われる。確かに、どの言語にも「文」といえる単位があるとか、音の面での最小単位としての音素が存在するとか、抽象的なレベルでは普遍性が認められるが、通常云々される「普遍性」はもっと具体的なレベルの事柄に関するものであり、そのような意味で「普遍性」という言い方をすると、異なる言語の間に具体的なレベルの事柄の一致が見られるという考え方に陥る危険がある。従って、「普遍性」といった用語でなく、たとえば「（異言語間の）類似性」といった言い方をすべきであろう。それでは、１つの言語の中に認められるある事柄と別の言語の中に認められる似たような事柄を「同じ」でありうるとする考え方がなぜいけないかというと、そのような考え方を容認すると、必ず、ある言語の事柄を別の言語の枠組みで解釈する（もっと端的にいえば、別の言語の枠組みを押しつける）誤りに陥るからである。そして、実際かなりの数の言語学者がこうした誤りをおかしている。これと関係して、たとえば日本語の「～タ」は「完了」をあらわすのか「過去」をあらわすのかという問題提起も誤りである。この問題提起は、問題提起者が、「完了」とか「過去」といった、外延の定まった特定の概念が言語の中に位置を占めると思い込んでいることを暴露している。しかし、言語の中のいかなる事柄も、上述の如く、無限大分の１の確率の現実化であり、それが外延の定まった特定の概念にピッタシ対応することはありえないのである。また、そういう外延の定まった特定の概念にどの程度に類似しているかを問うのもおかしい。なぜなら、そういう外延の定まった特定の概念が言語の中に位置を占めているとする根拠は存在せず、従って、それからどの程度に離れているかを考えても無意味である。唯一、意味のある問題提起は、「～タ」

の意味は何か、「～タ」はどういうことをあらわすか、といったことでしかありえない。また、多くの言語学者に「論理学コンプレックス」というべきものが認められる。つまり、論理学を何か非常に厳密な科学であるように錯覚し、何とか論理学の用語で言語現象を説明しようとするのであるが、論理学というのは、少数の学者が考え出した体系であり、無数の人々の認識活動の結果としての言語の諸現象を論理学で推し量ろうというのは、0.001mmの違いが意味のある対象を物差しで計ろうとするのに似ている。

言語は極めて「頭のいい」存在であり、それに比べてはるかに「知能の劣る」我々個々人が、その言語の真の姿を知ろうとするならば、こまっしゃくれた先入観を捨てて、徹頭徹尾その言語から素直に学ぶしかないのである。

第1章　言語本質論

本書で扱う事柄は、すべて何らかの意味で言語の本質に関係しているものであるが、ここでは言語の本質的な事柄のうち言語全般に関するものを扱う。

§1．言語とは何か

言語とは一口でいえば何かと問われるならば、「音を利用した記号体系で、意思伝達の手段」であるというのが、最善かどうかはわからないが、最も妥当な答えのうちの1つであろう。まず、「意思伝達の手段」という点について考えてみよう。言語に意思伝達の手段という役割があることは誰も否定しない。異論があるとすれば、それが最大の役割であるという点に関してである。確かに言語にはそれ以外の役割もある。たとえば、我々がものを考える時には、言語に依りつつ考える。このように、思考を支える役割がある。あるいは、歌や遊びや祭祀に用いられるという役割がある。さらに、自らの感情を表出するのに用いうるという側面もある。このように、言語には他の役割もあるが、その主要な役割が意思伝達の手段であることを否定することは誤りである。

言語の主要な役割が意思伝達の手段であることを否定するのは、人間への進化の過程において言語発生が果たしたであろう役割を考えないことから生じているように思われる。人類の祖先がチンパンジー(とボノボ)の祖先と別れて樹上生活から地上生活にうつり、直立歩行をするようになったことが人類への進化の最大要因であることは、一種の常識になりつつあるが、強い歯を持たず、強力な腕力も鋭い爪もない人間にとっては、何らかの形の社会生活を営むことで外敵を含む厳しい自然環境の中を生き抜かねばならず、そのような条件下で、さまざまな側面を含む社会生活をささえる意思伝達の手段として言語が発生したことの意味は大きかったはずである。言語が発

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com